

前期西田哲学における「感情」の自覚——カント、リップスの再解釈から

Self-Awakening of “Feeling” in early Nishida’s philosophy :

Through the reinterpretation of Kant and Lipps

後藤祐次郎 Yujiro Goto

京都大学文学研究科博士課程一回生

【使用言語：日本語】

本発表では、西田幾多郎の前期の著作『意識の問題』(1920)と『芸術と道徳』(1923)を対象とし、そこにおける「感情」に関する議論を通して西田の「自覚」がどのように発展したのかを明らかにする。

従来の研究において、上記の著作は『自覚に於ける直観と反省』(1917、以下『自覚』)で到達した「絶対自由の意志」の立場に基づいて西田が心理学・芸術・道徳について論じた著作とされており、後に「場所」の立場によって乗り越えられてしまう時期の思想として、取り立てて注目されることはなかった。しかし発表者は、これらの著作で論じられる「感情」に関する議論が「絶対自由の意志」の主意主義的な立場に回収されない重要な側面を持つと考える。「絶対自由の意志」は実在が無から創造される根源として『自覚』において西田が到達した最終的な立場だが、「意志」という表現が持つ自己完結かつ能動的な特性から、他の実在との関係を断つ絶対的な一者として表象されてしまうという恐れが存在する。後の西田自身による自己批判が示すように、その立場からは複数の個別的な意志による相互関係を理解することが困難になってしまう。

対して本発表では、西田の「感情」に関する議論に着目することによって、この時期の西田が他の実在との関わり合いの中で形成される開放的な「自覚」について考察していたことを明らかにする。そのために手引きとするのはカントの「反省的判断力」とリップスの「感情移入」に対する西田独特の再解釈である。西田はこれらの働きを「作用の結合」として理解することによって、多なる実在の相互関係の中から自己そのものが「感情」として発生する現場を取り押さえようとする。本発表では以上の作業を通じて、この時期の西田の思想に、「絶対自由の意志」の主意主義的な立場を超えて、後期の創造論にまで通じる重要な側面を見出すことを試みる。